NO 9

尾をひく「和魂洋才」

石飛敬志

日本には、古来から文明の導入にあたって独特の思考方法を持っていたのであるが、菅原道真のいった「和魂漢才」、佐久間象山の「東洋の道徳、西洋の芸術（芸術とは、今の技術という意味）」ということばがそれである。

そして、幕末以来和魂漢才の表現を和魂洋才に変えて、封建日本の西欧文明の導入が始まったのであるが、導入しようとしている西欧文明を生みだした思想や理論に目をとざして、日常生活を直接便利にするものとして受け入れることになったのである。

何故こんなことになったのか。

明治以降の日本人がこんなに早く西欧文明を摂取することができたのは、江戸時代から始まった蘭学である程度の覚悟と準備ができていたといわれているが。

しかし、西欧文明の値うちに気づいた八代将軍吉宗が、その導入に当って先祖以来の法令をあらためたにもかかわらず、ぜったいにおかしてはならぬ制約条件をつけたのである。

それは、キリスト教に関係するものを、いっさい厳禁したのである。

人文科学、社会科学は勿論、また自然科学においてもキリスト教の自然観について論議を展開しており、このキリスト教にふれることなしには成立しないのであるが、キリスト教の「キ」の字も輸入させまいと、長崎の日本人の役人が気をつかったのである。

その結果、洋書の輸入も事典、図鑑、実験手

引書などのような、限られた種類にならざるを得なかった。このことでまことに象徴的なのが「解体新書」である。

当時オランダ学に関心を持っていた杉田玄白らが、たまたま入手したヨーロッパの人体解剖学のテキストを見て、東洋医学の通説とのあまりの違いに不審をいだき、日本歴史に残る有名な「腑わけ」を行ったのである。そしてその正確なことに驚き、テキスト苦心のすえ翻訳したのが「解体新書」である。

それが象徴的だということは、日本の洋学史上に画期的業績としての「解体新書」でありながらそのなかみは、思想も理論もいっさい含まない砂をかむような単なる人体の構造に関する図入りの解説書だからである。

つまり、西欧文明は最初からこのようなものとして理解され、研究されてきたのであり、思想や理論をともなわないかわりに、事実の記述に関してはおそろしく正確になされたのである。

このように、日常生活をより便利にするだけの、そういう手先の技術として認識され導入されたのである。

今、一冊の本を読みなおしたのであるが、そのなかに（米食。肉食の文明～著者 筑波常治～NHKブックス85）「古今東西をつうじて、人類が残した書物はおびただしいが、そのうちこれまでに、いちばん多数の読者をつかんだものを三つだけあげてほしい。……（と質問して）……普通の日本人が、ぜったいに答えられないものは、つまり念頭にすら思いうかべないのは、もう一つのユークリッド『幾何学原論』である。」と書き、日本ではまったくといってよいほど読

まれず、その翻訳も今だにないのである。

西欧の一部では、この翻訳があるかどうかをその国の文化水準をはかるバロメーターにしているところもあるというが、さすれば日本は今だ文化国家ではないのか。

何時までもこのような常態、態度では、日本は世界史の中の主役になり得ず、三枚目にあまんじなければならないのである。